１．史跡周辺の特徴

公共施設　52haの敷地に散策路、観察小屋、ネイチャーセンターがあり、野鳥・小動物・草花の観察ができる小鳥の森、阿武隈川堤防には福島市から伊達市までサイクリングロードが整備されています。生涯学習・社会教育施設としてはもちずり公民館（４月よりもちずり学習センター）があり、46の利用団体があります。学校は、岡山小学校と月輪小学校があり、中学校は阿武隈川を渡った福島第三中学校の学区となっています。

農業　旧阿武隈川氾濫原の肥沃な土地を利用した都市近郊野菜栽培が盛んで、キュウリ・ほうれん草などが栽培されています。キュウリの栽培面積は、市全体の4794haに対し2487haを占め、ほうれん草も市全体2525haのうち1642haを占めています。旧阿武隈川流路は水田に利用され、米作りが行われています。

工業団地　宮畑遺跡に隣接する福島工業団地は81.3haの敷地で、現在18社が立地しています。業種は下記のとおり多岐に及んでいます。また、月輪大橋を渡った瀬上工業団地は、15.2haの敷地で食料加工業の企業が多く立地しています。
【福島工業団地立地企業業種】

液晶表示パネル及びモジュール	ガス・液体クロマトグラフィ装置	プレカット加工建築材
印刷物	エアーテント	ラベル、ステッカー
学校用家具、調理台、実験台等	自動車部品の取り付け	シール印刷
鋼材のプラズマ加工	流水除塵機	磁気測定機器
マイクロ波通信装置用アンプ	波止弁・空気管頭	運送業
ガラスクロス、ガラスパウダー	メンズウエアー	

観光資源　先の文知摺観音の他に、冬には800羽を越える白鳥飛来地が小鳥の森近くの阿武隈川にあります。里親制度があり県外の里親も数多く、冬には白鳥飛来地と市内施設を周遊する白鳥号が運行されています。

導　線　宮畑遺跡への交通手段としては、自家用車利用と公的交通（路線バス）があります。自家用車では、国道４号線と国道115号線より県道福島・保原線を利用することになりますが、国道115号線から文知摺観音・お春新田古墳群をとおり、宮畑遺跡の西側に接道する路線として、市道山口・宮沢線を現在整備中です。バス路線は４路線があります。福島駅から最寄りのバス停（向鎌田）までの所要時間は約20分で、バスの運行本数は以下の通りです。
月の輪団地行き・・１日20本　保原駅経由保原・・１日10本
梁川行き・・・・・１日６本　五十沢行き・・・・１日６本

周辺の土地利用状況
宮畑遺跡周辺は、都市計画区域上、市街化区域と市街化調整区域に指定され、市街化区域は福島工業団地の地区で、工業地域と工業専用区域に定められています。福島工業団地の地区以外は市街化調整区域です。また、市街化調整区域の広い範囲が農業振興地域に定められています。
史跡指定地内では、市道天神平・宮畑線の東側が市街化区域（工業専用区域）、西側が市街化調整区域で、市街化区域は工業専用地域に指定されています。また、現在、水田や畑として利用されている天神平・宮畑線西側の地域は、農業振興地域に定められています。

２．史跡周辺の自然的環境

宮畑遺跡周辺は、福島盆地床の中で大きな沈下がなかったため標高が最も低い地区にあたっています。東部山麓沿いには、阿武隈川により形成された下位砂礫段丘が発達し、宮畑遺跡はこの下位砂礫段丘上に立地しています。遺跡西端には比高差約３mの段丘崖がみられ、段丘崖西側の低地部には胡桃川が北流しています。
本遺跡東側をみると、阿武隈山地（高地）の西縁に位置する低い山地が分布しており、火山性堆積物が発達し、花崗閃緑岩・花崗岩の上を、礫･砂･泥･泥炭を挟む堆積物の未固結堆積物が覆っています。
宮畑遺跡西側には阿武隈川旧河床の凹地が確認できます。阿武隈川は、福島盆地北東部でたびたび洪水を引き起こした結果、流域に氾濫原を形成し、現在は畑地帯を形成しています。阿武隈川は、寛永年中に行われた東部山麓より西方への流路付け替え工事や度重なる洪水により現在の流路になりましたが、宮畑遺跡の北東には、1689年（元禄２）に松尾芭蕉が阿武隈川を渡り瀬上に着いた月の輪の渡し跡があり、阿武隈川は現在より東側を流れていたことが確認できます。

３．史跡周辺の植生

宮畑遺跡東側は阿武隈山地（高地）低山帯に位置しますが、同低山帯の植生は、コナラが優占したクリ・クヌギ・トネリコ・ホウノキ・カエデ類などの落葉広葉樹とされています。宮畑遺跡周辺の植生調査は実施していませんが、宮畑遺跡から南へ約3.5kmの小鳥の森建設時の植生調査より、マツ・スギの植林とともに、薪炭へのコナラなどの利用による人為的植生が認められ、阿武隈山地（高地）低山帯の典型的な植生が認められることから、人間と里山との長期にわたる共生を見ることができます。調査を実施した４地区の植生概況は以下のとおりです。

新山霊園地区：コナラ林＋造成面の二次草地

八寺沢地区：コナラ林＋造成地の低木林

五本松地区：アカマツ林＋耕作放棄地の二次草地

南浦地区：アカマツ林＋スギ林＋耕作放棄地の二次草地

４．史跡周辺の歴史的環境

縄文時代の遺跡は多くありませんが、山口地区・天神平地区などの東部山麓で縄文時代の遺跡が発見されています。多くの遺跡の内容はほとんどわかっていません。宮畑遺跡東の山地を越えた伊達市側にも縄文時代の遺跡は存在しますが、その数は多くありません。その中で、宮畑遺跡の北西に位置する天神平遺跡では、縄文時代後期～晩期の遺物とともに、土面が発見されています。弥生時代の遺跡はこれまでのところ発見されていません。

これに対し、古墳時代・中世の遺跡は数多く存在します。その遺跡分布をみてみますと、東側丘陵上に古墳時代後期の古墳群が多く分布する特色があります。多くの古墳は発掘調査を実施していないため、その内容についてはわかっていない古墳が多いのですが、宮畑遺跡の北に位置する月ノ輪山１号墳は、昭和63年に団地造成に伴い発掘調査を実施しました。調査の結果、長軸11ｍ30㎝の石室を伴う７世紀前半の円墳であることが確認され、頭椎大刀の出土から、被葬者は、軍事力を備え、中央政権との結び付きをもった有力首長とされています。上条古墳１号墳は、全長45～50ｍの前方後円墳で、発掘調査により金銅製圭頭大刀の柄頭・鞘尻等が出土しています。７世紀の築造とされ、福島市で最大の前方後円墳です。月ノ輪山１号墳の東側丘陵には天神平山古墳群、南方には源氏山古墳群・上ノ平古墳群・岡本舘跡古墳群・高松古墳・御春新田古墳群など、東部山麓に分布し、この分布は、北は蓬莱地区、南は伊達市まで続いています。

古墳時代後期になり古墳に副葬される人々が拡大した結果と考えられます。源氏山古墳群では金銅製の唐草文のある刀装具が出土し、上ノ平古墳群は平成８年度の調査で鉄刀・馬具・耳環などが出土しています。また、本遺跡付近の甲塚古墳では、昭和27年に調査が実施され、切石の胴張り石室内から金環と刀子、石室外から直刀・槍・馬具の一部が出土しています。

また、遺跡東側の丘陵の源氏山遺跡からは、鏡面に胎蔵界中台八葉院の毛彫り御正体のある藤鏡の八稜鏡が発見されています。

現在では福島市工業団地の一部となりましたが、腰浜廃寺跡に瓦を供給した宮沢窯跡群は本遺跡南東の丘陵に存在しました。昭和38年に５基の瓦窯跡の発掘調査が実施され、腰浜廃寺創建期にあたる７世紀の蓮華文鐙瓦・重弧文宇瓦の一群とされる瓦が焼成されたことが確認されています。腰浜廃寺の９世紀に用いられた瓦を焼成した赤埴瓦窯跡は、山口地内に所在しています。

中世になると古墳群が分布する丘陵に岡本舘（高松城）が築かれています。岡山地区にある中世の館は、源頼朝の東北平定後に伊達郡を賜った伊達氏と関わりがあり、岡本舘は、源氏の流れをくむ高松近江守源定隆によるもので高松城とも呼ばれますが、天正年間に伊達氏の家臣岡本吉太夫が居城したため岡本舘とよばれています。また、中世にはやはり伊達氏とつながりのある大波氏一族の居城とされています文知摺城・山口城があったとされますが、正確な位置はわかりません。

宮畑遺跡南の鹿島神社は延喜式内信夫５社の一つとされ、毎年10月19日に水かけまつりが行われます。以前は宿で行われていましたが、現在は神社境内の水屋で行われています。現在も頭屋（当前）制が継承され、県重要無形民俗文化財に指定されています。小倉百人一首にも詠まれた虎女の悲恋伝説で有名な文知摺観音は、松尾芭蕉、正岡子規が訪れ歌を詠んでいます。松尾芭蕉は元禄２年（1689）に訪れ、「早苗つかむ　手もとや　昔しのぶ摺」と呼んだとされていますが、境内内の芭蕉句碑には「五月乙女に　しかた望ん　しのぶ摺」と記され、「早苗とる・・・・」の原句とされます。芭蕉は、文知摺観音の後、宮畑遺跡の近くを通り、月の輪の渡しで阿武隈川をわたり瀬上宿、そして飯坂町の医王寺を訪れています。正岡子規は明治26年（1893）７月に松尾芭蕉の故事にならい訪れ、「涼しさの　昔をかたれ　しのふずり」と詠んでいます。境内には、東北地方唯一の多宝塔があり、県重要文化財に指定されています。また、残念ながら現在まで技術が継承されていませんが、吾妻鏡にも記述がある信夫もちづりは、絹地に紫や山藍、萩の花、つき草（つゆ草）、めはじき、椿の葉などの色素で乱れ模様に染めた古代染めで、平安時代には殿上人の狩衣や婦人の重ね着に愛用されていました。『吾妻鏡』　雲慶（運慶）への贈り物に「信夫毛地摺千端」との記述があります。また、古今集・千載集・新勅撰集・新古今集・続拾遺集・新後撰集・続後拾遺集・新拾遺集・新続古今集等にも「信夫文知摺」が詠みこまれています。

江戸時代の村に目を転じると、阿武隈、川東には山口村・岡部村・岡本村・中島村がありました。山口村・岡部村は、天正18年（1590）の奥州仕置により蒲生氏郷の支配になった後、岡部村は一時三河国刈谷藩領（1792～1814）の時代があり、上杉家・本多家・堀田家・板倉家の支配を受け、福島藩の領地として存続しました。これに対し、岡本村・中島村は、蒲生家・上杉家・本多家・堀田家時代までは山口村・岡部村と同じく福島藩領地でした。堀田家の支配後は、一時岡本村は新発田藩、中島村は足守藩の分領時代がありましたが、それ以外の時期は幕府領に属しています。

岡本村・中島村では顕著であり、阿武隈川の氾濫原が広がる岡部村は、土地の特性を利用して畑の石高が多く、現在の野菜産地の姿は江戸時代から形作られていたことがわかります。

水田開発は、上杉領時代（1598～1664年）の開墾奨励策により広く行われたと考えられ、阿武隈川沿いの岡部村では、元和元年（1615）の岡部大旦の開墾が記録されています。以来、着実に開墾が進められ、元禄９年には29反８畝９歩（11.318石）の開墾が行われ、それ以降も寛政11年１反３畝（3.99石）～18反（5.682石）を超える開墾が進められています。これらの開墾は、全国で進められた用水堰の開鑿の進展の流れの中で進められたもので、福島藩では、元和元年（1618）に西根下堰が開鑿されています。しかし、阿武隈山地（高地）と阿武隈川との間が狭い阿武隈川東岸は、水系の発達に乏しいため、灌漑用水には胡桃川などの小河川やため池の水が用いられました。しかし、明和７年（1770）に製作されたとされる阿武隈川舟運図には阿武隈川本流とともに、大きく迂回する古川が描かれ、『御普請明細帳』には享保15年本内村より鎌田村・瀬上村へ新川が出来、旧阿武隈川から用水していたと記されています。

その一方で、毎年のように阿武隈川の氾濫により川欠が生じ、２斗以上１石５斗もの川欠が生じています。天保２年には16町６反１畝15歩（117石337）に上りました。岡部にある大旦は、古河善兵衛が寛永年間に水難救助のために愛宕神を祀るために築いたもので、享保８年（1723）の洪水の際には、村人は大旦に逃れたといわれています。元文４年（1739）には斎藤藤左衛門が土地の水害や災難から逃れるために経石を埋納して経塚を築いてます。

宮畑遺跡の東には、現在東根堰が流れていますが、この堰は昭和10年に福島市渡利の信夫発電所から阿武隈川の水を自然流入により取水して整備されたもので、幹線水路27.6ｋｍで導水し、灌漑面積は福島市・伊達市の846ｈａに及んでいます。

2）保存整備、活用の対象とする遺構

・３時期の集落が存在する宮畑遺跡の重層性
・縄文時代晩期集落の空間構成
・縄文時代晩期集落の主要構成要素である掘立柱建物と埋甕、遺物包含層の河川と河畔林の復元と展示
・縄文時代後期集落を代表する敷石住居の展示
・縄文時代中期集落を代表する竪穴住居（ＳＩ４９）の復元と焼失住居の様相